

〈研究ノート〉

アイヌ口承文芸に描かれたヤナギ科の樹木の特徴

安田千夏

目次 はじめに

1. ヤナギ科の樹木についての概要とアイヌ文化からみた分類に関する問題点
 2. 口承文芸資料にみるsusuと総称されるヤナギ科の樹木の特徴
 - 2-1. susuの先駆性が語られた資料
 - 2-2. ヤナギ神の伝承の概要
 - 2-3. アイヌ語アーカイブス「貧乏人の娘がヤナギの神の助言で幸福になった話」
 - 2-4. ヤナギ神の伝承についての分析と考察
 3. ドロノキの伝承について
- おわりに

はじめに

前稿¹で筆者は、自然界における樹木の樹相とアイヌ口承文芸資料にみられる樹木神の神格とはある程度の関係性が想定できるという考えを述べた。「立派な木」に成長する特定の高木類が人知を越えた非常に強い神力を発揮して人間を助けるというパターンの伝承にそれが端的に現れているとしたのであるが、しかしながら「立派な木」に成長する樹種の全てについて神格が高いと見なされているわけではない。際立った有用性などの条件と複合的に考えていく必要があるという点も併せて述べたが、どちらにしてもまだ検証していない問題は山積しているというのが現状である。

本稿では樹相以外にも自然界における樹木の特徴の中に神格に関わる要素がないかを考えるため、自然界で他の樹種に比べて際立った特徴を持つヤナギ科の樹木について取りあげることとした。ヤナギ科の樹木は、口承文芸資料中に神格が高い神とされる伝承が存在するが、他の神格が高いとされる樹種と比べると採録例が少ないという特徴がある²。そこにはどのような理由が想定され得る

¹ 安田 2012

² この点については本田 1997 で既に指摘されている。

のであろうか。そして神格が高い神として描かれているヤナギ神の伝承については、資料報告も含め若干の未解決の問題点について整理していくこととしたい。

1. ヤナギ科の樹木についての概要とアイヌ文化からみた分類に関する問題点

ヤナギ科の樹木は一般的に先駆性の高い樹種として知られている³。陽樹であり、荒廃地や伐採跡地、河岸の氾濫後の湿地などで既存の群落が攪乱を受けた後に他の樹種に先駆けて生育し、群生して林を形成する。しかし森林としての変遷を辿る場合は、こうした先駆的な樹種は陰樹などの自然侵入によって被圧され徐々に衰退していく。その結果として樹種が交代した後に至る陰樹の巨木が並び立つ極相⁴に至った森林で見る機会は少ない。

ヤナギ科は種数が多く、北海道の在来種では数十種に及ぶ。環境への順応性が高く、低地から高地までみられ、樹相も低木から高木までと多様である。その中で巨木にまで生育するのはオオバヤナギ⁵などの限られた樹種のみである。種が多様であるということは、比較のために一例をあげるとカツラがカツラ科の中で北海道に一種しかないということとは対照的な特徴といえる⁶。

アイヌ口承文芸資料では、ヤナギ科は一般名称「ヤナギ」にあたる「スス (susu)」として語られる。種名で語られる例はまれであるため、本稿ではsusuの訳語として一般名称の「ヤナギ」をあて、種名はひとまず問題としないこととする。但し口承文芸中に登場する樹種として知られるドロノキは、外見の印象などにおいて他のヤナギ科の樹木とは一線を画す存在に見える。つまりアイヌ語名で一般名称susuといった場合に、ドロノキが含まれるかどうかについては判然としないのである。口承文芸資料の中においても、管見の限りではドロノキのみがsusuではなくyayni、kurunni⁷などの種名で語られてる。そしてドロノキのアイヌ語名称ではヤナギを現すsusuは名称の構成要素として現われていない⁸。この点は、アイヌ文化においてドロノキがヤナギ科とは別種として認識されていた傍証のひとつとなり得るかも知れない。しかしながら現時点では、全くの別種と考えられていたということを実証するだけの具体的な資料を筆者は見いだしていない。ドロノキが植生などにおいてヤナギ科の特徴を有していることもまた事実であり、かつてのアイヌがその点をどのように考えていたかについて、現時点では不明という他ない。以上の点から本稿では一応ドロノキをヤナギの仲間分類しつつ、項を分けて取りあげることとする。

³ 北海道では代表的な樹種として他にハンノキ類、シラカンバが知られている。またマメ科の樹種にも先駆性の高いものがある。

⁴ 植生の遷移の最終段階で見られる平衡状態。ミズナラ、ブナなどの巨木に代表される陰樹が優占する。

⁵ バッコヤナギといわれてきたものをオオバヤナギに同定できる可能性を提示した論考として本田1999がある。

⁶ 本州の亜高山にはヒロハカツラがある。カツラ科は日本の在来種ではカツラと併せてこの2種のみであり、日本固有種でもある。

⁷ 宮部・神保1892、知里1953によると、yayniは道央方言、kurunniは道東、道北方言として採録されている。

⁸ 例えばトカチヤナギはcipnisusu, siwsusu、キヌヤナギはpetsusu, yaysusu、エゾヤナギはsiwsusuのようにsusuがアイヌ語名称中の構成要素となっているヤナギ科の樹木は多い。

2. 口承文芸資料にみるsusuと総称されるヤナギ科の樹木の特徴

2-1. susuの先駆性が語られた資料

ヤナギの先駆性が理解されていると考えられる口承文芸中の表現には、以下のようなものがある。

伝承地域：沙流 ジャンル：神謡 主人公：雷神⁹

(前略)

susu nitai	柳の木原は
hosaochiwe,	岸辺に茂り,
kene nitai	榛の木原は
homakochiwe,	丘辺に茂る,
shupki sari	茅原は
homakochiupa,	丘辺に茂り,
shiki sari	葦原は
hosaochiupa.	岸辺に繁る.

(後略)

これは神が人間の世界を俯瞰して描写するときの常套表現の中にみられる一節である¹⁰。ここではヤナギが神としての存在ではなく、単に情景を描写する表現の中に人間が見る樹木そのものの姿で描かれている。表現中ではヤナギと並んで先駆性の高い樹種であるハンノキ¹¹がセットで語られている点が示唆に富んでいる。そしてこの場合双方の樹種は個としての存在ではなく、群生する林として描かれている。これは先駆樹種の特徴、即ち広範囲に繁茂して林を形成するという特徴を反映しており、実際に俯瞰で見た場合に目視による識別が可能な樹林帯であることを的確に表現しているといえる。ちなみにヤナギ類の多くは実際に河畔に群生し、ハンノキ類のうち特にケヤマハンノキ、ミヤマハンノキはおもに平地から高山に群生するので、「柳の木原」が「岸辺」に、「榛の木原」が「丘辺」にという表現は、樹種の植生に鑑みても的確といえることができる。

また他に、ヤナギとハンノキがセットで語られる伝承には別のパターンもある¹²。そこではヤナギとハンノキはそれ自身が神ということではなく、悪神を懲らしめるためのアイテムとして機能し

⁹ 久保寺 1977a, kamuyyukar77

¹⁰ アイヌ語の原文が記録されたものは久保寺1977a、ネフスキー1991、萱野1998などに見られる。

¹¹ ハンノキの一般名称はkeneであり、特定の種類であるケヤマハンノキのアイヌ語名もkeneであることから混乱が生じる原因となっているが、本稿で取りあげたものはsusuと同様に一般名称 kene である。従って訳語は「ハンノキ」となり、この場合、ヤチハンノキ (*Alnus japonica*) の別名「ハンノキ」を指してはいない。あくまでも一般名称である。

¹² 道教委1978、萱野1979

ている。

2-2. ヤナギ神の伝承の概要

ヤナギが神格の高い神として描かれた散文説話は、樹木神全体の中で見るとさほど多くないがいくつかの採録例がある。

大谷1998には沙流地方の伝承としてこのような報告がある。「石狩川の下流の村で急に猟運が悪く病気になった人がいた。別の村に住むある娘が山に行くと『柳の木』と『榎の木¹³』が木の枝を擦り合わせる音が人間の会話のように聞こえて、猟運が悪くなった原因を話して聞かせてくれた。その娘が石狩川の下流の村に行き、木の神の話を家人に伝えて無事解決し、木の神様たちには木幣を捧げて感謝した」。

萱野1979には日本語のみの資料¹⁴でこのような話が紹介されている。「ある男が許嫁を訪ねていく途中、ヤナギとハルニレの木が立っていた。その木が人間の姿となって男と相撲をとり、木の神を負かせたのちに許嫁のもとに行った。そこには男そっくりに化けた雷神の息子がいて、相撲で決着をつけることとなったが、事前に木の神の力を借りていた男は勝つことができた。男は木の神に感謝をして木幣を捧げ祈った」。

2-3. アイヌ語アーカイブス「貧乏人の娘がヤナギの神の助言で幸福になった話」¹⁵

伝承地域：沙流 ジャンル：散文説話 主人公：人間の娘

<梗概と一部アイヌ語原文>¹⁶

a=onaha an a=unuhu an.	父がいて母がいて、
sine matkaci a=ne wa an=an wa	ひとり娘が私でした。
a=onana a=unuhu inep ta	父と母は、それはそれは
i=yomappa wa ikipa yak a=eramiskari no	私を可愛がる様子は見たことがないほどで
i=coknurepa kor i=pirkarespa p	私にキスをして、大切に育てくれました。
ne korka a=onaha mak katu ne wa	けれど、父はどうしたことか
ne ya kesto kimun _hike ka	毎日山猟にいても
sine isepo poka ka eomuken kor	一匹のウサギすらも獲れません。
yakkonupeatte kor iwak kor	泣きながら帰って来て

¹³ 「榎の木」がコナラ、ミズナラのどちらかは同定できない、話者にとっては「どんぐりのなる木」という程度の認識であったかも知れない。

¹⁴ 採録地域についてのデータは未確認

¹⁵ アイヌ民族博物館2008、話者は川上まつ子氏

¹⁶ 本稿のアイヌ語ローマ字表記は、奥田総己氏の指導のもとアイヌ民族博物館の音声資料活字化事業で用いられている表記法に準じた。

orano sinki ipor eipor_ tum _wa	疲れた顔色を顔の面に
sinna kane huciape enucisiske	ありありと現して、火の神様をじっと見て
yaykonupeatte kor ki kor an siri	泣いている様子を
a=erampokiwen ka a=oyamokte ka	可哀想に、不可思議に
ki kor an=an ora	思いながら暮らしていました。

父は家のまわりの仕事をしていましたが、大きな村のはずれにぼつんとある私たちの家以外では、互いに酒宴に招待し合い、楽しそうに騒ぐ様子を父はうらやましいようでした。父は「もしかして自分の狩りの魂は誰かに盗られてしまったのではないか」といったりしていました。

そのうちに私は一人前の娘になり、ある日家に喪服を着た若い男性が訪ねて来ました。それは川下のほうに住む村長の息子さんで、このようにいいました。「私は両親に先立たれ、妹とふたりで暮らしています。妻を持ったが先立たれてしまったために喪服を着て暮らしているのです。でも妹を嫁に出したらまたひとりになってしまうので、こちらの娘さんを嫁にもraitたいのです」。父は驚いて、貧乏人の家なのでそれはできないと断りましたが、再三頼まれるので、父も「もしもあなたの猟運が悪くなったときに、『貧乏人の娘をもらったから』とだけはいわないように」と念を押して、承諾をしました。翌日その男性が狩りにいくと、大きなシカやクマを獲って来て、猟運のある人だとわかりました。

2、3日してから私は男性と一緒に嫁ぎ先に行くと、男性の妹である人は私に嫌な態度をとり、食事と一緒にしようとはしませんでした。そして私が嫁いってから旦那さんの猟運は急に悪くなって、獲物が獲れない日が続き、私に対して怒っているようで口をきいてくれませんでした。私の家の近くにはヤナギの木があつて...

suy susumoto poro susumoto	またヤナギ、大きなヤナギが
an pe ne a _hi kusu ne susumoto	あつて、そのヤナギを
pirkano piskanike a=casnure hine	きれいにまわりを掃除して
susumoto okari toyta=an kor	ヤナギのまわりに畑を作って
an=an a p	いたのだけれど

(中略)

suy kunneywa ipe oka=an akusu	(旦那さんは) また朝食を終えて
nani kimosma hine isam okake ta	すぐ山猟にいつてしまった後で
nea susumoto uske ta arpa=an hine	そのヤナギのところに行って
cis=an kor sinotcaki=an kor	泣いて唄を唄っていると

唄を唄ってから家に帰ると、旦那さんが家の中で「貧乏人の娘を嫁にもらってしまったために、このように急に獲物が獲れなくなったのだろうか」と独り言をいつているのを聞いてしまいました。父が念を押していたにも関わらずそんなことをいつのかと思つて、悲しくてその日は泣きな

がら眠りにつきました。

isimne _hike suy kimosma wa isam
okake ta ne a=kor susumoto o uske ta
arpa=an wa cis=an kor mono a=an wa
sinotcaki=an.

(中略)

a=esinotca oro itak kor cis=an kor
sinotcaki=an kor an=an a p,
i=osmake un nea susumoto nitekehe
ukerkere pekor rera ka isam pe ukerkere
pekor humas kusu sinotca
hontom tuy=an hine ikokanu=an
akusu ene hawas.
"asinuma aynu a=ne wa itak=an
siri somo ne.
tan susumoto a=ne wa itak=an
siri ne kusu pirvano e=nu yak
pirka na.

翌日、また（旦那さんが）山猟に行ってしまった
後で、あのヤナギがあるところに
いって泣きながら座って
唄を唄っていました。

私が唄に言葉を乗せて泣きながら
唄っていると、
私の後ろで、あのヤナギの枝が
擦りあったように、風もないのに擦りあった
ような音がしたので、唄を
途中でやめて耳を澄ませた
ところ、このようにいっていました。
「私は人間の言葉で話をしている
のではありません。
このヤナギが私であって、話をします
のでよく聞いて
ください。

お父さんは人間の魂を作る神が猟の魂を入れ忘れたために、そのように生まれついてしまった
のです。あなたの旦那さんが奥さんを亡くした後、旦那さんの妹は兄が好きだったので、そこに
あなたが来て面白くないので嫌な態度を取り、旦那さんの猟運を持つ刀のつばを女性用トイレに
入れてしまったので猟運が悪くなってしまったのです。今日あなたは実家に行って泊まりなさい」
というのでした。

そこで実家に帰ると、旦那さんが追いかけて来ました。わけを話すと今までのことを詫びて妹
を叱りつけ、猟運を持つ刀のつばをトイレから取り出してきれいに洗い木幣をつけました。それ
から猟に行くときさっそく大きなクマが獲れました。それからは猟運にも恵まれ、両親は私たちの
家の近くに新しく家を建て、面倒を見ながら幸せに暮らしました。妹は村の下端に住み、普通の
男性と結婚しましたがあまり猟運に恵まれず、私たち夫婦が面倒を見てあげました。そして子ど
ももたくさんできて、それぞれ成長していきました。

tane onne=an wa mosiroppa=an siri
ne wa a=po utari a=matnepo utari
a=kaspaotte. "wenkewtumkor=an wa
wensanpekor=an kor pak asitoma p

もう私は年老いて、この世を後にするよう
なので、息子たち娘たちに
いい聞かせました。「悪い心を持ち
悪い気持ちを持つことくらい恐ろしいものは

isam pe ne. ir utar utasaroski	ないのだよ。兄弟姉妹が互いに争うこと
pak asitoma p isam pe ne na.	ほど恐ろしいことはないのだよ。
ene iki=an a hi neno eci=iki wa	私がしたようにおまえたちはして、
pirka uweturaste eci=ki ora	仲良く慈しみあって
ne susumoto i=okake ta ne yakka	あのヤナギの神に、私が死んだ後であっても
eci=oyra somo ki no	おまえたちは忘れずに
eci=nurappanomi yakne a=po santek	供養して祈ったならば、子孫の代
orunno susumoto punki=an wa	までもヤナギの神が守って
apunno eci=sukup nankor_ na" sekor	穏やかに生きていけることでしょう」と
hawean=an kor onne=an.	いって、私は死んでいくのです。

2-4. ヤナギ神の伝承についての分析と考察

2-3. で語られる樹木の姿は、原文を確認しても尚不明瞭な部分がある。ここでヤナギ神は *susumoto* と語られており、このように樹木名の後に *moto*¹⁷ が来る例は他に管見の限りない。話者が語った日本語訳中ではこの部分を「ヤナギの根っかぶ」と明言しているので、「切り株」と考えるべきかも知れない。しかしアイヌ語の原文を見ると、その直後に「*i=osmake un nea susumoto nitekehe ukerkere pekor, rera ka isam pe ukerkere pekor humas* (私の後ろで、あのヤナギの枝が擦りあったように、風もないのに擦りあったような音がした)」という表現になっている。このヤナギ神には枝があったと考えることができるので、単に枯れた切り株と考えるのには一考を要する。そこで、この部分にの訳について筆者は3つの可能性を考えてみた。

- ① *moto* は話者がいう通り「切り株」で、「枝」は木が伐り倒されたことにより新たに出たひこばえの傍芽が成長したものである。その枝が主人公の背後にあり、枝を擦りあわせた。
- ② *moto* は「起源」を意味する。群生したヤナギ林の中で、ひときわ大きな「立派な木」に成長したものを親株と考え、敢えて *moto* をつけた。
- ③ *moto* は「原因、理由」。事件が起きた理由を人間に伝える神であるという意味あいが含まれている。

現状ではこれ以上の考察の手がかりを筆者は持たないので、今後新たにアイヌ語資料の原文で類話を確認する機会を待ちたい。

またこの伝承は、猟運に恵まれていた人が急に猟運が悪くなり、その原因には *iso ramat* 「狩りの

¹⁷ 日本語「もと」から来るともいわれ、起源、素性、原因、理由を意味する名詞。

魂」に関わる物品が関係しているという点、そしてその原因について、ヤナギなどの樹木神が枝を擦り合せて音を発し人間の言葉として第三者に伝えるという点など、大谷1998で報告された伝承との共通要素があった。

3. ドロノキの伝承について

ドロノキに関しては、さらに明確に先駆性について描かれた伝承が存在する。以下の例は数多の類話がある¹⁸中のひとつである。

伝承地域：白老 ジャンル：不明 主人公：不明¹⁹

(前略)

昔此の世の始めに神がヤイニ (どろの木) を生やして下った。アイヌは之れで火をおこそうとしてカリキシヤ (木と木の摩擦によって火をおこす方法) したが、いくら努力しても煙りばかり出て遂に火はおこらなかつた。それでどろの木と煙は嫌われて遠ざけられた。次に此の世に現はれたのはチキシヤニ (あかだもの木) である。今度はこの木でカリキシヤした処直ちに火がおこつた。アイヌはこの火をカムイフッチと称え、最高の神として尊敬する様になった。先きにどろの木から生れた煙は頗る不満で之れを嫉み遂に病の神となって人に禍を与える様になった。病の神をパーコロカムイ煙の主神と云うのは此の為めである。火の神は煙の神の弟である関係上、流行病の話などは火の神の傍では遠慮する事になっている。それは火の神が人に対し気の毒がられるからである。尚流行病の時ほどろの木は妒にくべない事になっている。

この伝承では、この世に一番先に生えたのがドロノキであると語られている。しかしドロノキは火熾しに適さず、悪神を生み出すことになる。神格が高いハルニレとの対比が効果的に働き、ドロノキが悪玉的存在として描かれている。

以下は口承文芸資料ではないが、植物のアイヌ語名の聞き取りデータの中に本稿のテーマに関連する部分があったので補足資料として引用する。

「なしてyayniって名前つけるんだ」ってhuci (おばあさん) に訊いたけ、「yayni kamuy (ドロノキの神)、sirkorkamuy (大地の神) とも。tuk (育つ) するだけtuk konno aynu koraci onne konno, kekke (育つと、人間のように年を取ると、折れる) して落ちる、すぐmunin (腐る) するんだ」って。それでyayni yaymuninka sirkorkamuy ne wa rehe an=kore katu yayni ari (ドロノキは自分で自分を腐らせる神だから、名前をつけたのが「ヤイニ」って)。弱い、一番弱い

¹⁸ 知里・久保寺1937、名取1939、久保寺1977b

¹⁹ 満岡1926、ジャンルは不明ながら久保寺1977bの類話は「ウバシクマ」であるとされている。

sirkorkamuy (大地の神) で、そういつてkamuy orowa an=rekore, yaymuninka (神から名前をつけられて、自分を腐らせる) するから、yayni。河原いっばいおがって (=生えて) いるんだわ。枯れて、自分で枯れて、枝裸になって落ちるんだわ。ちよして (=触って) 軽っこい (=軽い) やつkekke kekke (～を折り取る) して持ってきて、huci apepokunpe (おばあさんが焚きつけ) に使ったりして覚えていた。今だら (=なら) そのドロノキ、yayniっていうもの河原になくなってしまった。あれは山の中にはないはずだ。山子 (=造材の仕事) に4年も5年もおら歩いたけど、ドロノキっていう木は、ちよした (=扱った) ことない²⁰。

この話者がyayniというアイヌ語名の由来として祖母から聞いた話は、ドロノキは育つだけ育つところで折れて枯れてしまう樹種であり、そのことが樹木神としては「最も弱い神」とされる理由だと明確に述べている。河原に生え、山の中では見かけない²¹という植生に関する的確な情報も付加されている。

おわりに

本稿での論点を以下に整理する。

口承文芸資料中、ヤナギはハンノキとセット関係になる例がいくつかある。その場合両者は群生する林として描かれ、先駆樹種の特徴を表現していると考えられた。

冒頭で触れた通り、ヤナギ神の神格が高いと見なされる伝承はあまり多くの採録例がない。胆振日高地方で神格の高い神と見なされる樹種の代表であるハルニレ神やカツラ神と比べた場合、その差は明らかである。既に述べた通り、この科の樹種の先駆性という性質は、若木が林として群生するという特徴を伴うことから、筆者が前稿で「危機救済型」の条件のひとつとした「立派な木に成長する」要素が成り立ちにくい、個の存在として認識されにくい樹種であるといえる。2-2. 2-3. で取りあげた伝承の樹相に関する描写をみても、一本立ちになった立派な木であるという明確さをどこかで欠くという共通点がある。²² しかしヤナギ科の樹木は、情景描写や木幣材として描かれた資料²³なども含めて考えると、口承文芸資料中での役割が多様であり、種数や樹相などにみる自然界におけるヤナギ科の樹木の多様性という特徴をそのまま反映しているようにも見えるのである。

ヤナギ科の樹木はまた荒廃地や河畔など、つまり「山」ではなく人間の生活域のごく近隣で普通に見られるという点、そして生命力が非常に強いという点で資源枯渇の憂慮なく大量に採取することができる、アイヌの生活においては木幣材や生活用具に使われる極めて身近な樹種であったということも、神格が高い樹木として認識されにくい理由のひとつであったと考えられる。

またドロノキの伝承ではより明確に先駆性に関わる理由で「良くない木」と見なされていること

²⁰ アイヌ民族博物館音声資料34109、話者は織田ステノ氏

²¹ 実際には倒木などによって森の中に陽が差し込むと、かつて優占していたドロノキなどの先駆樹種が生育する場合がある。しかし全体的に見てそれは稀な事象であり、この伝承者の発言は観察として正しいといえる。

²² 久保寺1977a、ネフスキー1991、萱野1998、道教委1999 など

²³ オオバヤナギ、ドロノキなど限られた樹種は「立派な木」に成長する。

がわかった。そしてそれは主に胆振日高地方で形作られた火熾しの伝承中にも象徴的に認められた²⁴。そしてハルニレがドロノキとは反対に火熾しに使われる、即ち有用性の高い樹種であるということが、神格の高さを決める重要な要素であるということも確認できた。

本稿では筆者が調査した胆振日高地方の伝承についての考察以上のものではない。それ以外の地域の伝承を精査すると当然また違った樹木神の姿が見えて来るのであるが、それについては稿を改めたいと考えている。

本稿をまとめるにあたり、札幌学院大学の奥田統己氏、札幌市立大学の矢部和夫氏、モニターの各氏に貴重なご意見を賜りました。記して感謝申し上げます。

<引用参考文献及び資料>

アイヌ民族博物館

アイヌ語アーカイブス事業活字化資料2007, 2008

大谷洋一

1998 「小川シゲノから上田トシへの伝承2」

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第4号』北海道立アイヌ文化研究センター

萱野茂

1979 『ひとつぶのサッチポロ アイヌの昔話』 平凡社

1998 『萱野茂のアイヌ神話集成 第1巻、第3巻、第5巻』 平凡社

久保寺逸彦

1977a 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 岩波書店

1977b 『アイヌの文学』 岩波書店

知里真志保、久保寺逸彦

1937 「アイヌの疱瘡神パコロカムイについて」

『東京人類学会日本民族学会連合大会記事 第2回』 東京人類学会日本民族学会連合大会編

1953 『分類アイヌ語辞典 植物編』 日本常民文化研究所

名取武光

1939 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」

²⁴ ドロノキが常に悪玉的役割をする樹種とは限らない。地域によっては丸木舟になる良材であり、それらの地域の資料を精査するとまた違った面が見えて来ると思われる。

- 『北方文化研究報告第四号』 北海道大学北方文化研究室編
- ニコライ・ネフスキー
- 1991 『アイヌ・フォークロア』 北海道出版企画センター
北海道教育委員会
- 1978 『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 昭和52年度 無形民俗文化財3』
北海道教育庁生涯学習部文化課編
- 1999 「Ⅱ 静内町での暮らし 5. 樹木の名前と祖先の名前」
『アイヌの暮らしと言葉6』 北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編
- 2000 「アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ13 トウイタク（昔語り3）」北海道教育委員会
本田優子
- 1999 「ヤナギに関する一考察 アイヌの丸木舟に用いるヤナギの樹種の同定とその学名について」
『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第5号』北海道立アイヌ文化研究センター
- 満岡伸一
- 1926 『アイヌの足跡』第二版 田邊眞雄
宮部金吾、神保小虎
- 1892 「北海道アイヌ語植物名詳表」『東京地学協会報告14-1』
安田千夏
- 2012 「アイヌ口承文芸に描かれたイヌエンジュ、エゾニワトコの神格について」
『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第18号』北海道立アイヌ文化研究センター

Title: Characteristics of *Salicaceae* Trees Depicted in Ainu Folklore

In the previous paper, I posited that dendritic features were one of the determining criteria of whether a tree was considered as a higher divinity in Ainu folklore. In this paper, I investigate whether there are other criteria that determine a tree's divinity, other than dendritic features. Focusing on the *Salicaceae* tree family, I investigated how its distinguishing pioneering features is reflected in folklore materials, and how the deification of this tree species is positioned.

In Ainu folklore, trees in the *Salicaceae* family are referred to as *susu*, which corresponds to the generic term, “willow.” There are very few cases in which these trees are spoken of in their species names, and only *Populus suaveolens* in the *Salicaceae* family is referred to in its species name as *yayni*, *kurunni*. Whether or not *Populus suaveolens* was considered to be part of the willow tree family in the tree classification of Ainu culture remains to be examined; however, in the present paper, I have chosen to consider *Populus suaveolens* and the generic term *susu* separately.

In the tradition of willow gods, there were recorded cases of traditions that consider it to be a higher divinity, but there were not many. In addition, expressions related to its dendritic features—one of the elements of a higher divinity—was lacking in clarity, in contrast to *Maackia amurensis* described as “fine and sturdy trees,” as seen in the previous paper.

Expressions related to the pioneering features of the willow and *Populus suaveolens* were seen in traditions. However, it was found that *Populus suaveolens*, according to the data used related to trees depicted in fire-starting traditions in the Iburi and Hidaka areas, was recognized as an “unfavorable tree.”